

「ITソリューションの環境効率評価ガイドライン」目次案

1. 適用範囲

- ・このガイドラインの目的と、対象とするITソリューションの定義

【例】

- ・本ガイドラインは、ITソリューションの環境負荷、環境効率の評価、およびこれらと比較評価するための一般的な枠組み、原則、要求事項を記載したものである。
- ・評価対象とするITソリューションは、業務や生活様式の改善のため、情報技術を利用した機器、ソフトウェア、サービスの1つまたはこれらを組み合わせたシステムによる解決策全般を指す。

2. ITソリューションの環境負荷評価の枠組み

2.1 一般

- ・環境負荷評価全般に関する記述

【例】 ・環境負荷評価はライフサイクルアセスメントに基づく

2.2 機能単位

- ・機能単位に関する記述

【例】 ・機能単位は明確に定める。例えば、……。
・1年間あたりの活動とすることが多い。

2.3 システム境界

- ・システム境界に関する記述

【例】 ・ライフサイクル全体のプロセスを考慮する。
・例えば、ハード設計、ソフト設計、運用、……というプロセスがある。
・運用は特に重要なプロセスである。

2.4 評価対象となる活動

- ・環境負荷評価を行うにあたり着目する各種活動に関する記述

【例】 ・機器使用、人移動、……という活動を評価対象とする。

1) 公共交通機関による人移動の評価方法

2) 執務空間および保管空間の評価方法

- ・面積に比例すると考えることが可能な、執務および物保管に伴う空調、照明、IT機器等の負荷の取り扱い

3) 人の活動(工数)の評価方法

- ・工数に比例すると考えることが可能な、人の活動に関わる空調、照明、IT 機器等の負荷の取り扱い

4) ネットワークインフラ(インターネット等)の評価方法

5) ソフトウェアインフラ(OS 等基盤ソフトウェア)の評価方法

3. IT ソリューションの環境効率評価の枠組み

- ・環境効率評価の方法に関する記述

【例】 ・環境効率評価は(便益 ÷ 環境負荷) で算出される。

・環境負荷評価は、2 章の枠組みに基づく。

・便益評価は、.....によって行われる。

4. IT ソリューションの比較評価の枠組み

- ・比較評価の方法に関する記述。環境負荷比較と環境効率比較(ファクター)の両方

【例】

・ソリューション A を基準とするソリューション B の環境負荷比較評価は、環境負荷削減量(ソリューション B の環境負荷 - ソリューション A の環境負荷)、環境負荷削減率(環境負荷削減量 ÷ ソリューション A の環境負荷)で算出される。IT ソリューション導入前後の比較評価に用いることができる。

・環境負荷の比較評価では、機能単位はなるべく合わせる。差異がある場合はその内容を明確にする。

・ファクター評価は(ソリューション B の環境効率 ÷ ソリューション A の環境効率)で算出される。

5. 原単位例

- ・原単位の例。電気、紙、公共交通機関、インターネット、PC、サーバーなど
- ・インターネットの原単位は、必要かつ可能ならば更新する。

6. 事例集

- ・評価の適用事例

以上